Ernest Hemingway と自然

宮　田　満　雄

I

> Finding the country unspoiled and being able to have it again and share it with the people that were together last July, I was as happy as I had ever been and all the overcrowding and the modernizations at Pamplona meant nothing.[1)]

これは1959年夏，スペインを再度訪問した Hemingway がパンプローナの祝祭の騒音から逃がれて，イラチ河畔の太古の森の静寂の中でもらした言葉である。彼が青年の時からあれ程魅せられたパンプローナの祝祭も，自然の魅力の前には取るに足りないものであった。

Hemingway 程自然を愛し，また，その中で奔放な生活を楽しんだ人物はあるまい。彼の自然愛好は，彼に始まったことではなく，彼の家に代々伝わってきたものであった。彼の父方の祖母，Adelaide Edmonds Hemingway，は苦学しながら Wheaton College で植物学と天文学とを専攻した。

Hemingway の父親は，この母親の感化によって自然に対する目を開かれた。彼は幼少の頃からインディアン部落に出入りし，彼等と親しく交わった。食用や薬用の植物を調べたりして，初めは獣医を志していたが，結局医者になった。大学在学中にノースカロライナ州のグレート・スモーキー山の地理探検隊に加わったことは，彼の自慢の一つであった。

この自然愛好と行動的な性格は，そのまま Ernest に受けつがれていった。Ernest Hemingway は，幼い時から祖母や父親を通じてナチュラリス

1) "The Dangerous Summer" *Life*: Vol. 49, September 12, 1960, p. 75.

ト的なオリエンテーションを受けていたわけで，このことは Ernest と自然について考える時に重要な要素である。これらの事情は，Ernest の一つちがいの姉 Marcelline の書いた *At the Hemingways* に詳しい。[1] 更に Ernst の生来の行動的で冒険好きな性格と自然とを結びつける要素として，ミシガン州のワルーン湖畔の生活がある。1900年の夏 Clarence Hemingway 夫妻は，この北ミシガンにある湖を訪れ2エーカーの湖畔の土地を購入して別荘を建てた。[2] 最も近い町のペトウスキーまで9マイル，シカゴの約300マイル北に位置するこの場所は，美しい自然にひっそりと囲まれた最適の別荘地であった。Sir Walter Scott を愛読していた母親は，その文学趣味に相応しく，早速この場所を Windemere と名づけた。弟の Leicester は，この場所について

> The best thing about the Windemere location was its beach. The clean sand made it an excellent place to camp, even had there been no house at all. [3]

と述べている。

Hemingway 一家は，しばしばここを訪れ，都会から離れてくつろいだ生活をこの自然の中で過すことになるのである。父親は殆ど夏中子供達と共にこの地で暮らし，イリノイとミシガンの両方の医師免許状を取って，近所のキャンプ中の人々やインディアン達を診てやったといわれている。ワルーン湖畔の自然は先ず湖であり，白樺，ブナ，楓，杉等の林であり，その中で棲息する魚であり小鳥であった。父親はここで子供達に水泳，釣，狩猟，乗

1) Marcelline Hemingway Sanford, *At the Hemingways*, Boston Atlantic Little, Brown, 1962.

2) Leicester Hemingway, *My Brother, Ernest Hemingway*, N. Y., World Publishing Co., 1962, p. 23.
この事情は前記 *At the Hemingways* によると最初に彼等がここを訪れたのは1898年，姉 Marcelline が生後7ケ月頃だと記されている。(p. 68)

3) Ibid., p. 23.

馬等の手ほどきをした。[1)]

このようにして Hemingway は幼少の頃から絵本や体験を通して自然を観察し，また，その中で楽しむ事を教えられ，その方面で次第に頭角をあらわしていった。声楽家であった母親は，彼に音楽を習得させるべく努力したが，それは空しい努力に終った。彼女は，"Ernest was such a disappointment to me." と嘆いていたことを弟の Leicester は思い出の中で語っている。[2)] 10才の誕生日に20口径の猟銃を祖父に与えられて後は，父親は一層力を入れて狩猟の訓練をほどこし，彼の腕前はめきめきと上達していった。射撃の時の火薬の臭いはいやが上にも Hemingway の射撃熱をあふった。彼の人格形成期における Windemere の自然の中での経験は彼の心から離れず，強烈な印象を残した。このことは，彼の作品の中にどれ程この経験に基いた舞台が用いられているかを思えば容易に理解できる。彼の殆どの作品に美しい自然，雄大な自然，荒らあらしい自然，健康な自然が扱われていることは周知の通りである。ある時は北ミシガンの自然であり，また，他の時は雄大なアフリカの草原であり，灼熱のスペインであり，また，悠久のメキシコ湾流である。そして，その中に語られる一つ一つが自然の中における彼の経験を基調としている。彼の描く自然は，作者の imagination を通して得られたものではなく，彼が身をもって体験し，親しんだ自然であった。この小論においては，彼が自然をどのように作品の中に表現していったかを主としてその技法の点から眺め，更に彼の自然観に触れようとするものである。

II

Hemingway は多くの作品の中で対照的な場面を描写することによって一層それぞれの印象を強烈なものとし，場面のイメージを強く読者の脳裏にやきつけることを試みている。これは彼の小説の重要な技法である。そして

1) *At the Hemingways*, pp. 68～102.

2) *My Brother, Ernest Hemingway*, p. 28.

この場合，しばしば自然の描写が用いられている。

> They were seated in the boat, Nick in the stern, his father rowing. The sun was coming up over the hills. A bass jumped, making a circle in the water. Nick trailed his hand in the water. It felt warm in the sharp chill of the morning. [1]

上の引用は "Indian Camp" からの引用である。Nick と彼の父親は，インディアン女の帝王切開を終え，その夫の自殺に遭遇して今湖を渡って帰途につくところであった。この強烈な経験と，すぐその後に述べられた早朝のこの静かな湖の描写は何という鮮かな対照であろう。そして，この興奮と静寂のコントラストの中で主人公 Nick は，自分は決して死にっこないと確信するのである。

> In the early morning on the lake sitting in the stern of the boat with his father rowing, he felt quite sure that he would never die.[2]

また，"The End of Something" において，感受性の強い若い Nick と Marjorie の会話の背景になっている入江，その中を泳ぐ鱒，入江のむこうから昇る月，その光の中にくっきりと浮び出してくる丘等がどれ程この短い作品の場面の効果を読者に強くやきつけることであろう。そして彼等は，この一見ロマンティックな背景の中で困難な若者らしいいらだちを感じ，それぞれが孤独な道を歩んでいくのである。

"Big Two-Hearted River" において Nick は，荒廃したシニーの町に帰ってくる。Philip Young 流に考えれば，精神と肉体の両面に深傷を負い，単独講和を結んで帰ってきた Nick の姿である。

彼を迎えたシニーの町は，火災のために荒れ果て，強い日光の中ですっか

1) *The First Forty-Nine Stories*, Jonathan Cape, London, 1954, p. 99.

2) Ibid., p.99.

り乾き切っている。その中に Hemingway は昔と変らず流れつづける美しい澄みきった川と，その中に静かに棲息する鱒を描くことによって，乾いたシニーの町を一層クローズアップさせ，同時に新鮮な流れのうるおいを読者にやきつけるのである。キャンプ地を一面に覆う夕もや，一夜明けて朝露に濡れた草，そのみずみずしい自然の香り，これらが Nick の傷心と何と明瞭で強烈なコントラストを示していることであろう。そのことによって読者は，一層強く Nick のもつ心の空虚さと渇きとを感じ，自然のみずみずしい美しさに印象づけられるのである。*Winner Take Nothing* においても，その中にはさまざまな性格と特徴をもった短編が含まれているが，それらを通じて，やはりこの特徴は明瞭にあらわれている。次の言葉はこの点を明らかに指摘している。「その背景には，山岳や野原や町や海や木々などが非常に鮮かにいわば光と影だけによって捕えられ写されている。光と影をぼやけさせる湿気や霧やあいまいなものは何も存在しない。降る雪すらプラットフォームから射す光の中で捕えられ，屋根に降って直ぐ消えるものとして写されている。いわば，彼の小説の世界を構成する，キッカリと鮮かで歯切れがよく乾燥した背景がすべての作品に共通している。」[1)]

また，*The Old Man and the Sea* においても，キューバの町およびその周辺の人間社会と，自然の大海との対照が見られることは周知の通りである。このような技法は他の長編にも顕著に見られ，それは単に場面と背景の対照のみならず，小説の構成そのものにも応用されている。*The Sun Also Rises* においてこの構成上の大きなコントラストのきっかけは，スペインのブルゲート地方のコルク樫やブナの林等の素朴な風物と，そこを流れる美しい渓流，そこにおける健康な鱒釣に始まり，更に進んで灼熱のスペインにおける祝祭，闘牛，また，その周囲の原始的な風物，人情となり，それが前半のパリにおける頽廃的なムードと対照され，この作品に何か，単なる陰うつな虚無的なムード以外のものを与えるのに役立っている。高村勝治氏は，この

1) 「ヘミングウエイ全集1」，三笠書房，昭和30年，p. 273.

小説の第一編から第三編までを，暗—明—暗の構成であると指摘している。[1] また，Carlos Baker もこの作品について Burguete-Montparnasse, Catholic-Pagan, Romero-Cohn の対照を指摘している。[2] 更に *A Farewell to Arms* においてもこの技法は顕著にあらわれている。すなわち，第1部から第5部までがそれぞれ春，夏，秋，秋，冬という配列になっていて，それはまた，死—生—死—生—死という対照をなしている。[3]

これらの事を通じてわれわれは，この対照の技法が彼の作品を鑑賞するために，文体と共に非常に重要なポイントになることを知るのである。この明暗，光と影のコントラストは絵画的な手法を思わせるものである。彼が修業時代に足しげくパリのリュクサンブール美術館に通って，セザンヌや，マネ，モネ等の印象派の絵を学んだ事を思い合わせると興味のあること である。[4] このようにして彼の背景に対する配慮は更に象徴的な意義をもって発展していくのである。

III

Hemingway の symbolism において自然の果す役割は大きい。 Carlos Baker は，*A Farewell to Arms* の冒頭の一節をあげ，その中に描写されている情景が単に小説の書き出しというだけではなく，その部分が象徴的にこの小説全体のムードを表現していると指摘している。[5] 山岳，平野，晩秋，冬等いずれも単に場面の背景としての みならず，象徴として 考えら れている。特に Baker によれば山岳と平野が最も重要な象徴となっている。彼はこの小説の対照的なイメージとして，Home-concept と Not-Home concept

1) 高村勝治，「ヘミングウエイ」，研究社，昭和30年，p. 44.
2) Carlos Baker, *Hemingway : The Writer as Artist*, Princeton Univ Press, 1963 p. 101.
3) Cf. 高村勝治「ヘミングウエイ」，p. 78.
4) Cf. *A Moveable Feast*, N.Y., Scribner's, 1964, p. 81.
5) Cf. Carlos Baker, *Hemingway : The Writer as Artist*, p. 94.

とを指摘し，その前者が山岳によって象徴的に表現され，一方後者が平野によってあらわされるとしている。

> The Home concept, for example, is associated with the mountains; with dry-cold weather; with peace and quiet; with love, dignity, health, happiness, and the good life; and with worship or at least the consciousness of God. The Not-Home concept is associated with low-lying plains; with rain and fog; with obscenity, indignity, disease, suffering, nervousness, war and death; and with irreligion.[1)]

また雨は，不幸の象徴として用いられる。これは批評家達がこぞって指摘するところである。冒頭の章では，長雨は冬と共にやってきてコレラをともない，7,000人の死をもたらす。また，ミラノで別れる恋人たちにも雨は降りそそぎ，カポレットの敗戦の日も雨は退路を泥濘化する。また，相愛の2人が湖を渡って逃がれていくのも雨の夜であり，彼等の山中での束の間の幸福に終りを告げるのも雨，そして，最後にキャサリンの死後主人公は傷心をいだいて雨の中をホテルへ歩いて行くのである。そして全体の構成の背景として前述の如く四季を配してその象徴的な効果をあげている。

また，*The Snows of Kilimanjaro* においても，その雪をいただいたキリマンジャロの霊峰は，imortality の象徴であり，その頂上近くに乾枯らびて凍りついた豹の死骸は不朽を求める人間の無力を象徴しているかの如くである。また，死の床に横たわるハリーのキャンプの周辺を飛び交う不気味な鳥達や腐肉をあさるハイエナは，迫りくる死を読者に強く意識させるものである。

また，*The Old Man and the Sea* の大海原は人生そのもの，あるいは人間が挑もうとしている強大な運命ともいうべき自然を象徴している。

かくの如く Hemingway の symbolism にはさまざまな自然の姿が用いられているが，それらが象徴的に表わしている内容は，何ら難解なものでは

1) Ibid., p. 102.

なく，むしろ非常に常識的であるとさえいえる。多くの場合，それは象徴というより，山岳，平野，雨，雪，四季の推移等を配することによってその場の描写をよりよく，また，より強く読者にやきつける効果といった方が適切であるかも知れない。

彼が抽象的なものより具体的なものを尊んだ事は Baker も sense of fact として指摘しているところであり，[1] 長々と説明するよりは描写に頼ろうとした事も知られていることである。従って彼が人間の感情や気分を表現しようとする時，感情や気分そのものを直接書くことをやめ，何かほかの，感覚が確かめ得る具体的なものに頼るのである。[2] 幼い時から博物学的な訓練を経て，自然の中のどんな小さな音も敏感に聞きわけ，また，その香りを嗅ぎわける感覚を有した彼が，そのような時にさまざまな自然の姿を媒介にして感情を伝えるのは至極あたり前のことと思われる。Hemingway は，小説の一コマ一コマを冷静に眺め，それを完全に描写しようと努めた。それは S. Anderson の作品が絵画的であるというのに似て絵画的な手法である。「もしヘミングウェイの象徴が問題になるのなら，小説の中に現われているイメージを探し求めるという方向へではなく，部分をしかと眺め，つかみ，描き切ることによって，そこにおのずから全体を表現させようとする彼の決意と努力に注目すべきである。」[3] という言葉は示唆に富んだものであると考える。

IV

Hemingway はその修業時代に，S. Anderson の影響を受けたことは何人も認めるところである。Anderson もその作品の中で自然を扱ったが，彼の扱う自然は，一般化された自然であって，それは中西部のいかなる自然にも通用するものであった。しかしながら Hemingway の場合，その描く自

1) Ibid., p. 48.
2) Cf. 谷口陸男「ヘミングウェイ研究」，三笠書房，昭和31年，p. 240.
3) Ibid., p. 242.

然や地理的条件は一般化されたものではなく実在のものであり，それぞれ固有の自然を適確にとらえて描くところに特徴がある。ホートンス・ベイ，フロリダの海，シニーやセント・イグネスの町，あるいはイタリヤ，スペイン，アフリカ，すべて実在の，しかも彼の経験のうちにあるものであった。

これも sense of place と sense of fact を重んじた彼の作家としての特徴であろう。殊に自然に関してはその背後に彼の自然に対する深い愛着が潜んでいることを何人も疑うことはできない。幼少の時から自然に対して開かれた彼の眼と，その中におけるスリルにみちた生活，また，その中で味わう心の安らぎは終生彼の心をとらえて離さなかった。彼は自然に魅せられた男といっても過言ではあるまい。彼がその作品で描く自然は，かならずしも甘い感傷にみちたものではない。ある時はどんな人間の営みをも押しつぶしてしまう強大で，不気味な力をもって人間に迫ってくるものである。しかしながら，彼の作品を読む時に彼の自然に対する憧憬，親愛感，親和感を見逃すことはできない。「自然が観察されるならば人間的に観察されねばならない。すなわち自然の景色は必ず人間の愛情と結びあわされている。たとえば人間の故郷がそうであるように。」[1] というのは Henry David Thoreau の言葉であるが，Hemingway の自然もこのような形でとらえることができる。そして，Hemingway が Thoreau について，"There is one at that time that is supposed to be really good. Thoreau." [2] と述べ，また，自然に対して強い郷愁をあらわした Mark Twain について "All modern American literature comes from one book by Mark Twain called Huckleberry Finn." [3] と述べていることを思いあわすと更にこの感を深くする。

"Ten Indians" にでてくるミシガン北部の牧歌的な自然，独立記念日の祭りを終えた Nick は夜露にぬれた草原や湿地の泥道を裸足で歩いて行く。

1) *The Writings of Henry David Thoreau*, Manuscript Edition, Houghton Mifflin, 1906, Vol. X, p. 163.

2) *Green Hills of Africa*, Jonathan Cape, London, 1956, p. 28.

3) Ibid., p. 29.

ブナの繁みの向うに小屋の灯が見える。またその夜，失恋して枕に顔をうずめる Nick の部屋の外を吹いていく風の音，湖の波の音等がこの短い作品に詩情を与えている。"Now I Lay me" の Nick, 今彼は戦場で不眠の夜に悩まされている。彼の脳裏に去来するものは鱒釣であり，杉の木立ちであり，草むら，羊歯，バッタ等故郷の自然であった。身心共に傷ついた Nick にとって，これらの自然の囁きや，脳裏に去来する自然の情景は心の慰め以外の何物でもなかった。"The Doctor and the Doctor's Wife" における Nick は炎暑の夏でもなお涼しいアメリカ栂の森の中で読書をしている。母親が呼んでいるにもかかわらず彼は父親について黒リスの住んでいる森の中へ胸を躍らせながらついていくのである。母親の与えたチェロに見むきもせず，父親の与えた釣竿をかついで喜々として自然にひかれた Hemingway 自身の姿が生き生きと描かれている場面である。"Big Two-Hearted River" における自然は何と新鮮で豊かな詩情を湛えていることだろう。

キャンプのそばを流れる冷たく澄んだ渓流，そのそばの露にぬれた草地，ミンクが行きかう沼地，それらが朝夕の空気の中で見事に描き出されている。松の小枝を吹きぬける風も Nick に語りかけるかの様である。焼けて廃墟と化したシニーの町に立った Nick は，懐かしい川のところへ行く。鱒を見て彼は心がひきしまり，自然の中で味わうあのスリルにみちた緊張感と親愛感とを取りもどすのである。

> Nick's heart tightened as the trout moved. He felt all the old feeling.[1)]

そして彼は，シニーの町は焼けてしまったが，すべてが焼けてしまう筈はないと思う。そして，そのことを彼は確信していた。

> Seney was burned, the country was burned over and changed, but it did not matter. It could not all be burned. He knew that.[1)]

1) *The First Forty-Nine, Stories* p. 187.

2) Ibid., p. 188.

そして彼は，起伏する丘稜を額に汗して越えて行き，彼を待っている場所へと急ぐのである。それは彼の心の故郷，自然であった。一夜をテントでひっそりと孤独のうちに過した Nick は，次の一日十分に自然の懐の中で釣を楽しむのである。鱒に対して感じる彼の愛情は *The Old Man and the Sea* において老人 Santiago が巨大なマーリンに対して抱く心情と共通のものであり，遂には逃してしまうことになる大きな鱒に対して感じる驚きと敬意にみちたあの興奮は，Santiago がマーリンに対して抱く敬意と興奮であり，読者は Hemingway の後年の作品に表現されている心情の源泉をここに見出すことができるのである。かくして傷心の Nick はこの自然の慰めによって心を癒やされ，はじめて何か読むものを持ってくればよかったと思うのである。

> He wished he had brought something to read. He felt like reading.[1)]

Nick は釣が終ってキャンプに帰る時，未練を残してふり返る。木立ちの間から川が招くようにのぞいていた。しかし彼は，これからいつでも釣れるのだと自らにいいきかせるのである。久し振りに故郷に帰ってきた者が味わうあの安緒感である。

> He climed the bank and cut up into the woods, toward the high ground. He was going back to camp. He looked back. The river just showed through the trees. There were plenty of days coming when he could fish the swamp.[2)]

Hemingway は1933年11月から翌年3月までアフリカへ狩猟旅行に出かけた。1935年10月にこの時の経験をまとめて *Green Hills of Africa* を出版した。アフリカはスペインと共に彼をひきつけた国であった。アフリカにお

1) Ibid., p. 208.
2) Ibid., p. 206.

いて彼はしみじみとした幸福感を味わうのである。

> …looking at the thick bush we passed in the dark, feeling the cool wind of the night and smelling the good smell of Africa, I was altogether happy.[1)]

> This was the kind of hunting that I liked. No riding in cars, the country broken up instead of the plains, and I was completely happy.[2)]

また，丘の上から平原を見おろし草をたべている縞かもしかを見て彼は，

> …it was very satisfying to watch them and to be high in the mountain that early in the morning.[3)]

と申し分ない満足感を述べている。狩猟のスリル，雄大な自然等すべてが彼をとらえ，彼はその中で，それまでに養ってきた肉体と感覚を総動員してこの生活を楽しむのである。しかし，彼を真にこの広大な大陸にひきつけたのはその中での生の充実感であった。

この原始的な自然の中で土人達が自然と調和した生を営んでいる姿の中に彼はこれを発見したのである。彼は文明が豊かな国土を次々と破壊していくことに憤激を覚えていた。彼にとっては文明からむしろおくれたこの大陸における，原始的な，自然と調和した生の営みが好ましかったのである。

> A continent ages quickly once we come. The natives live in harmony with it. But the foreigner destroys, cut down the trees,…[4)]

1) *Green Hills of Africa*, p. 14.
2) Ibid., p. 60.
3) Ibid., p. 168.
4) Ibid., p. 274.

そして，アフリカは生きることが喜ばしい国であることを発見したのであった。この地において彼は自然と人間の調和のうちに真に生きる姿を発見したのである。

> I would come back to Africa but not to make a living from it. I could do that with two pencils and a few hundred sheets of the cheapest paper. But I would come back to where it pleased me to live; to really live.[1)]

これはちょうど，文明に汚されていく白人社会に幻滅した D. H. Lawrence がニューメキシコの自然とナバホ・インディアンの調和した生の営みの中に価値を見出しそれに魅せられたのに似ている。[2)] そして Hemingway の *In Our Time* について短編集の全体としての意味をいちはやく読みとったのが Lawrence 自身であったというのも興味ある事実である。[3)]

アフリカと共にスペインも彼が心から愛した国であった。いうまでもなくこの国の大きな魅力は闘牛であった。素朴なスペインの風物と人情を背景にして行なわれる闘牛を通して彼は生の充実感を満喫したのであった。 Hemingway にとっては，闘うべく生まれて，勇敢に闘う牛も自然であった。そして，この人間と牛の死闘を通して彼は人間の生と死と寿命と不滅感とを感

1) Ibid., p. 274.

2) Cf. D.H. Lawrence, *Mornings in Mexico*, New York, Alfred A. Knopt, Inc. 1927, pp. 104～108 ; *Assorted Articles*, New York, Alfred A. Knopf, Inc., 1930, pp. 91, 94, 97, 110, 137.
The Letters of D. H. Lawrence (Edited with introduction by Aldous Huxley), New York, The Viking Press, 1932, pp. 589, 606, 618, 625.
Dorothy Brett, *Lawrence and Brett*, Philadelphia, J.B. Lippincott, 1933.
Mabel Dodge Luhan, *Lorenzo in Taos*, London, Martin Secker, 1933, pp. 18, 34, 120, 122, 132, 281, 309.
Eliot Fay, *Lorenzo in Search of the Sun*, New York, Bookman Associates, Inc., 1953, pp. 46, 107.

3) Cf.「ヘミングウエイ」20世紀英米文学案内15，研究社，1966. p. 81.

得していたのである。[1)]

彼は故国アメリカに失望していた。そこは彼等の祖先が，これこそ行くべき土地だと感じて移っていった土地であった。しかし，彼にいわせればその土地を「われわれが滅茶苦茶にしてしまった」のである。[2)] 彼は更に良い空間をアメリカ以外に求めた。それはスペインでありアフリカであった。彼にとって良い国とは獲物や鳥が沢山いて，狩猟や釣が十分でき，素朴な人々が自然と調和して，文明におかされない生を営むことのできる土地であった。

彼がメキシコ湾流の洗うキーウェストに住み始めたのは1928年であった。メキシコ湾流はコロンブスが大陸を発見するよりはるか以前から永遠に流れ続ける流れである。彼にはこの悠久の海は魅力ある空間であった。

彼自身がしばしば獲物を求めてこの大海に乗り出した如く ***The Old Man and the Sea*** の Santiago は Hemingway のいう新しい，良い空間に幸運を求めて小舟を乗り出していくのである。

Hemingway にとって自然は確かに心の慰めであり故郷であった。しかし，彼は自然を人間の征服可能なものとは考えていなかったし，また，人間が自然に親しむことによって同化され，いわゆる自然と自我との合一の神秘的な経験をその中で味わうというものでもなく，更にまた，19世紀の人々がとらえていたような，自然の中に神の本質が啓示されているという種類のものでもなかった。彼は決して自然を愛するあまりこれを極端に美化することもしなかった。詩情あふれる自然の描写も，彼の細かい観察と実感をそのまま乾いた筆に託したものにすぎない。そこには冷静な眼があった。大海に乗り出した老人 Santiago は海を女性として感じていた。自然に対する親愛感のあらわれである。しかし，闘いを終えた老人は，"I went out too far."[1)] と述懐するのである。自然は人間に支配されるべきものではなく，両者の間には調和こそが大切なのである。宇宙はそれ自体の法則によって，人間には

1) Cf. *Death in the Afternoon.* 第一章。

2) *Green Hills of Africa*, p. 274. "It had been a good country and we had made a mess of it…"

3) *The Old Man and the Sea*, Jonathan Cape, London, 1955, p. 121.

無関係にその営みを続けている。自然の法則を知り，これを支配することは人間には不可能なことであり，また，そのような試みを企てること自体が間違っているのである。

人間は自然を征服するようには作られてないのである。人間には人間の分野があり，この人間の分を守って自然と調和した生を営むことに Hemingway は価値を認めた。人間の営みにおいて，死は最も確実な現実である。人間にできることは，許された生の中で如何に生くべきかを考え，実行することだけである。Hemingway に哲学がありとすればこれこそがそれである。そして，自然と人間の調和は彼の How to live の人生哲学の中で大きな位置を占めるものである。そしてこれこそ人間の最も原始的な姿なのであり，その意味において原始人 Hemingway として彼をとらえることが可能である。彼は D. H. Lawrence と並んで20世紀の偉大な premitivist であるといえよう。そして，自然は心の故郷としての優しさと包容力をもつと同時に，超絶的なものとしてわれわれの前に厳然とそびえ人間のいかなる思いあがりも許さない威力を誇示しているのである。